

18
ADULT ONLY



聖結晶姫

来町

機械姦の猛攻
吸い尽くされる聖結晶

○登場人物紹介

・蒼樹美月（あおきみつき）／聖結晶姫ミツキ

（身長:160cm 体重:50kg B:86cm(Dカップ) W:59cm H:85cm)

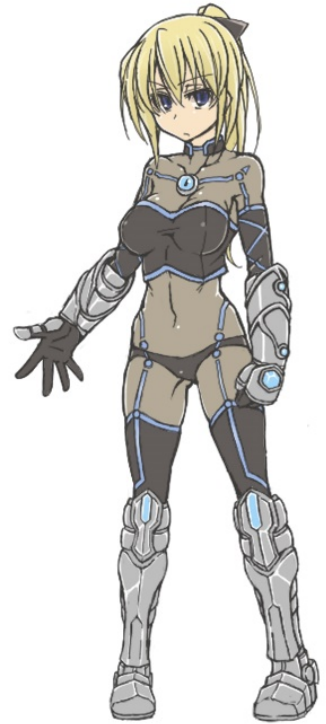
持ち主の心に呼応し、無限のエネルギーを生み出す精神感応結晶体「聖結晶」に100%の適合率を持つ奇跡の少女。

体内に移植された「聖結晶」の力を解放し、「聖結晶姫ミツキ」へ変身することができる。

変身後は圧倒的な戦闘力を発揮する半面、胸に露出した結晶体は変身ヒロインの最大の弱点でもある。

幼少期から悪の組織と戦うことにその身を捧げてきたため、一般的常識にやや乏しい一面を持っており、特に人とのコミュニケーションを取るのが苦手。

悪の組織レギオンに捕らわれ、その肉体を淫らに開発されてしまった過去を持ち、純情な心とは裏腹に性的攻撃に脆い一面を持っている。



・駒詰軍将（こまつめぐんしょう）

ミツキが潜入したロボット研究機関の所長。

真っ白な顎髭がトレードマークの老人で、嫌がる女の子に無理やりエッチなことをするのが趣味という歪んだ性格をしている。研究機関の裏側で戦闘用ロボット等凶悪な兵器開発を行っており、裏社会に精通する一面を持つ。

ミツキの身体と聖結晶のエネルギーに興味を持っており、ミツキを屈服させることで聖結晶の力を得ようと目論んでいる。

○用語紹介

・科学都市

科学の発展のために研究所や病院、教育機関の集めた人口の浮き島。

かつては悪の組織「レギオン」によって裏から管理され、非人道的な実験場となっていた。

・レギオン

科学都市を牛耳っていた悪の組織。聖結晶姫ミツキの活躍により、組織は壊滅へと追い込まれたが、ミツキは過去に1度レギオンに敗れ、屈服調教を施されている。

※ミツキとレギオンの戦いについてはpixiv版(<http://www.pixiv.net/series.php?id=184272>)聖結晶姫ミツキを読んで頂けるとよりお楽しみいただけます。

聖結晶姫ミツキ

～機械姦の猛攻、吸い尽くされる聖結晶～

目次

序章：暴かれていた正義のヒロイン

第一章：機械兵の猛攻

第二章：敗辱の巨兵

第三章：淫墮のエナジードレイン

第四章：奪われた聖なる力

終章：足掻き尽きた果てに

小説：北みなみ 挿し絵：おてるこ

序章 暴かれていた正義のヒロイン

照明を落とした真つ暗な部屋の中でパソコンのディスプレイだけが煌々と輝いている。不気味な笑い声を発し、画面を眺める老年の男がかけた眼鏡には、映し出された画像が反射して怪しく光を放っていた。

元々が痩せ型ではあるが、肉体の衰えと共に肉付きの薄くなっていた顔と身体は室内の暗さも手伝って白髪の骸骨が生贄を眺めているようにも見える。

だが、彼は冥界からの使者というわけではない、現実には存在する人間である。羽織った白衣には写真付きのＩＤカードが縫い止められ、この老人が科学都市に存在する、とある研究機関の責任者であることがわかった。

科学の発展を目的として作り出された人工の浮島「科学都市」。各分野のエリートが集う中で研究施設の責任者を任せられるということは、それだけ老人の能力が高いということの証明になる。

「クツ、クフフフ、何度見ても堪らんのおく〜」

外界から完全に隔離された個室は空調によって快適に管理され、壁を埋め尽くす本棚には電子工学やエネルギー理論といった理科系統に特化した書物がギッシリと詰め込まれていた。

俗にいう研究室の一つ。部屋の主である駒詰軍将（こまつめぐんしょう）教授はトレードマークとして伸ばした真つ白な顎髭を指先で撫で、画面に流れる映像を食い入るように観賞する。

軍将の視線を釘付けにするディスプレイに映し出されていたもの。それは巨軀の男達に取り囲まれる中、華麗に戦う一人の少女の姿だった。

「いつ見ても涎がこぼれるわい。聖結晶姫ミツキ、ほんととおおおおに、美しいのおお〜」

欲情する獣のように股間を摩り、変態教授は身を乗り出して目を輝かせる。

表向きは科学の発展を目的に作られたという科学都市。しかし、その裏では悪の組織による非人道的な計画が暗躍する魔都でもあった。一部の人間の利益のために生まれる、決して表には出ない犯罪の数々。圧倒的な力の前に抵抗すら許されず命を落としてきた人々がどれほどいただろうか。

かつてはレギオンと呼ばれる巨大組織によって裏社会は管理され、科学都市は本来の意味とは別の意味での実験場となっ

ていたのだ。

だが、そんな闇を打ち破る一筋の光が存在した。

一度は強大な悪に敗れ、捕らわれの身となった。受けた辱めは数知れず、身も心もボロボロにすり減らされながらも不屈の精神で逆転した正義の変身ヒロイン。それが軍将の観賞する映像に映っている少女、「聖結晶姫ミツキ」なのだ。

軍将の言う通り、悪を滅ぼす女戦士は美少女と呼ぶに相応しい存在であった。

筋肉隆々の男達に囲まれながらも臆することなく凛とした輝きを放つ切れ長の碧眼。研ぎ澄まされた冷淡な刃を思わせるシャープなラインの瞳と真っすぐな眉。彫りの深い鼻と桜色の薄い唇が凜美に配置された顔立ちには大人びた美貌を生み出している。

まばゆいばかりのブロンドの長髪は対照的な黒のリボンによってポニーテールに纏め上げられ、背中にむかって垂らされて、襲い来る猛攻を躲しながら尾を引くように跳ね回っていた。

子供と大人の中間という一生の内でも、ごく僅かしかないこの時期のみに許された究極の美はスタイル抜群のボディラインにも言えることである。

少女戦士の美体を包むのは黒を基調とした半透明のインナースーツ。首元から爪先まで余すことなく包みこむビニール質なスーツはミツキの身を守ると同時に、正義の戦士というにはいささか背徳的なデザインとなっていた。

敵の攻撃を躲すたびに挑発的に揺れるDカップの美巨乳。胸部にはインナースーツの上から青のラインの入った黒のチューブトップ型スーツを着用しているが、官能的な果実を隠しきることはできず、薄生地をパツパツに押し上げて自己主張を繰り返す。

何かの拍子にボディスーツからこぼれ落ちてしまいそうな量感を持ちながらも魅惑のラインは崩れることなく、ミツキの強気な性格が乗り移っているかのように先端を尖らせてツンと上向いていた。

胸に負けじと肉付きの良いヒップには胸部と同色のショーツ型スーツを履いている。運動性を重視し、密着性のある下半身のスーツは股間やお尻に大胆に食い込み、インナースーツによってラッティングされたグラマラスボディの肉感をより印象強くしていた。

躍動感溢れながらもムッチリとした脂肪を纏う太腿に力が込められ地を蹴ると、美脚と桃尻がプリプリと震えオスを誘うかのような華麗なステップを踏んで窮地を脱する。

グラビアアイドルにも負けない豊満で瑞々しい肉付きをしながらも、身体の線は基本的に細い。半透明のインナースーツに浮かび上がる縦長のお臍。力をこめたらば折れてしまいそうなくびれた腰は無駄な物が一切なかった。

漆黒のロンググローブとニーソックを纏う手足は引き締まってスラリと長く、女性の持つ華奢な雰囲気には拍車をかけた。メリハリの効いたパーフェクトボディ。異性は勿論、同性でさえ憧れてしまうスタイルの良さを持ちながら、だが、決して弱々しいというイメージはない。

「ふん、そんな攻撃……遅すぎるわ！」

津波のように押し寄せた男達の猛攻に対し、ダンスでも楽しむかのように回避したミツキは鈴の鳴るような凜とした声で相手を一蹴する。

腰を落とし、金属製の手甲と脚甲を装備した四肢が反撃の構えを取り、大きく深呼吸をして精神を集中させる。

瞬間、ミツキの胸元に位置する蒼い結晶体が神々しく輝いた。

生み出されたエネルギーはインナースーツの表面を伝播し、女戦士の身体の隅々まで破邪の力を宿らせていく。二の腕がキュッと締めまり、ムチムチの太腿に筋肉の筋が浮かんだ。

「はあああああっ！」

溜め込んだパワーを解放し、姿勢を低くしたミツキが敵の群れへと突っ込んでいく。銀色の武装から繰り出される拳と蹴りの乱舞。

さながら小型の台風が襲い来るような猛攻を前に、力自慢の男達はなす術なく吹き飛ばされていった。ミツキの包囲網は一瞬で瓦解し、統制の崩れた男達にもはや勝ち目は無い。

リーダー格の男の顎を蹴り上げ、美麗なる着地を決めたミツキはトレードマークのブロンドポニーテールをなびかせ、敵の殲滅を確認すると、気絶した男達を一瞥し、その場を立ち去るのだった。

そこで映像は終わる。

ディスプレイと額を密着させるほどに顔を近づけていた軍将は跳ね返るように椅子に戻ると、欲しかった玩具を手にした子供のように目を輝かせた。

「エエエエエエクスレント！ 流石、流石は聖結晶じゃ！ ああああああー、欲しいのお、この力！」

——聖結晶。

それはミツキの体内に埋め込まれた神秘の結晶体の名だ。持ち主の精神に感応し、無限のエネルギーを半永久的に生み出すオーバーテクノロジー。

この力は誰にでも扱えるというわけではなく、聖結晶への適合率百パーセントを持つミツキだからこそ制御できる神にも等しい力なのだ。

「この力を、このエネルギーをワシのものにできれば、科学都市の覇権は手に入れたも同然じゃ」

研究機関の教授としての表の顔ではなく、科学都市征服を企てる裏の顔を覗かせてほくそ笑む悪の科学者。ミツキの華やかさと聖結晶の神秘に魅せられ興奮していた気持ちをゆっくりと落ち着かせ、軍将は椅子へ深々と腰かけ直す。

「ふうーっ、興味惹かれると熱くなりやすいのはワシの悪い癖じゃのお」

顎髭を指で撫で、照明をつけて室内の雰囲気をつけた研究室へ戻すと、教授モードへと頭を切り替えた軍将は研究施設所員の名簿ファイルを開く。

蒼樹美月という女性所員のページを表示し、証明写真として撮られた画像に向け軍将は語りかけた。

「蒼樹美月……いや、聖結晶姫ミツキよ。ワシの計画に気付き、まんまと潜入したのは褒めてやるわい。じゃがな、その後がお粗末じゃたのー！ ハッキングの跡を残して正体がバレってしまったお主にはもはや勝ち目はないぞ。聖結晶の力、最後の一滴まで吸い尽くしてくれるわ……クフ、クフ……クフフフフフフ！」

たった一人で強大な悪の組織と戦うミツキにとって情報収集のための潜入捜査は避けて通れぬ難所。敵の巣の中に飛び込む以上、細心の注意を払ってはいる。

だが、今回はそこを越えることができなかったのだ。

何者かが軍将の計画を察知し、探りを入れていると気付くとカウンターのトラップを仕掛けた。ミツキとて今までの経験から電子戦には相応の実力がある。しかし、たとえ悪とはいえ天才と呼ばれる科学者を前には敵わなかったということだろう。

先ほどの映像からもわかるように、聖結晶姫はそのデータを収集され、今日という日まで泳がされてしまっていた。

真実を知らぬ女戦士を手中に収めよとする計画は、ミツキの知らぬところで静かに始まっていく。

軍将は固定電話の受話器を取り、内線を繋ぐと事務的、しかし、欲望のこもった声でその名を呼んだ。

「あー、ワシじゃ。蒼樹美月君に聞きたいことがあるから後で部屋に来るよう伝えてくれ。それから——」

畏にかかっても知らず息を潜める正義の戦士を墮とす悪の計略は一手一手確実に進んでいった。

※

好奇心と探求心に掻き立てられた人々が集まる研究所の終業は決して早くはない。望む結果が得られずに悔しさから実験を続行する者。望んだ結果が得られ、更にその先に進もうと残る者。場合によっては研究室に寝泊まりし、その生活の一片まで研究に使うとする者もいる。

いつもならばどれほど残ろうが構わない。しかし、この日に限っては責任者である駒詰教授より、帰宅の命令が出されていた。

——たった一人の女性研究員を除いて。

「失礼します、駒詰教授。あの、私の論文に不備でもありましたか？」

扉を二度ノックし入室してきたのは最近研究所に入ったばかりの新人。潜入のために経歴を偽装した仮初の人物。聖結晶姫ミツキに変身する前のもう一つ姿、蒼樹美月であった。

変装のためにかけたアンダーフレームの伊達眼鏡。肩甲骨にかかるほどの長さを持つ光沢のある黒髪は二つの三つ編みにまとめられ、肩の前に垂らされている。眼鏡と髪型の変更は普段の美月が持つ凜麗で大人びた雰囲気緩和し、代わりにどこもない幼さを付与していた。

それでも元々持つ艶めかしい肉体は隠しきることができなかったのだろう。前面のボタンを外したやや大きめの白衣によって肌は隠されているというのに浮かび上がるボディラインは女を感じさせる線を描く。

鎖骨を覗かせる程度にボタンを開けられた純白のブラウスは八十六センチのDカップという魅惑のバストによって胸元が袋状に膨らみ、歩を進めるたびに細やかに揺れて変態教授の視線を集めている。

生地自体が薄い上に密着性があるためか、その下で美乳のラインを支える黒の下着がカップの模様がわかる程度に透けてしまっていた。

研究者というよりはアスリートのように引き締まった細腰はコルセットでも巻いたかのようにくびれ、藍色のタイトスカートによって腰から膝上までを覆っている。ウエストにあわせたいで肉感的なお尻はややキツメなのか、厚手のスカート

生地の上からでも桃のような丸みを持ったヒップラインが強調されていた。

見ているだけでもハリと弾力の伝わってくる尻肉の肉付きは筋肉の上にムッチリと脂肪の乗った太腿にまで続き、男ならば誰もが目を惹かれる下半身のラインを演出する。

艶のある黒褐色のパンティストッキングがタイトスカートから伸びる脚線美を引き締め、シェイプアップされた脚の線はモデルと遜色ない魅力を引き出されていた。黒のパンプスが薄白色のリノリウムの床を叩き、大きな机を挟んで軍将と対峙した美月は一人の研究員として振る舞った。

時計の針は既に二十二時を回り、すっかり夜も深くなっている。なぜ、こんな遅くに自分が呼び出されたのかわからないといった表情を作り、あくまで無害を装いながらも思考をめぐらせた。

「まさか、私が潜入調査をしていたことがバレたの？ いえ、それならばこんな回りくどいことをするかしら？ それとも……」

人払いがされていることはこの部屋にくるまでの間で察知していた。

目の前にいるのは敵、しかも組織の中心を担う人物と深夜に個室で二人きり。なんらかの攻撃を仕掛けてくるならばこの時ではないかと警戒しながらも、美月は別の可能性を考慮している。

「いやー、不備など無いよ。君の提出する実験結果にはいつも感心しておるよ。実はこの前の論文で少々興味がある箇所があったな、そこを詳しく説明して欲しかったのじゃよ。こんな時間にほんとおおおおにスマンのお、ワシは興味惹かれると熱くなりやすいんじゃよ」

呼び出した理由はあくまで研究のことだと告げ、横にきてパソコンを見ながら説明してくれということだった。

時間帯に対する非常識さを除けば研究者とはこんなものなのかと思いつつ、美月は亡き母のことを不意に思い出す。

（そういえば、お母さんも昔は寝る間も惜しんで研究してたっけ……）

研究者、という人種を見ながら美月は幼き日の記憶を思い出す。

美月の母、蒼樹瑞穂はかつて科学都市で働く研究者だった。母子家庭であった美月にとって唯一と言える肉親。

朝から晩まで研究に没頭し、精神に感応してエネルギーを生み出す結晶体、聖結晶に辿りついた天才科学者であった。

レジオンという悪にいち早く気付き、母として苦悩しながらも幼き娘に希望の欠片を移植し、そして、聖結晶姫初陣の中で美月を庇って命を落としてしまった大切な人。

今の蒼樹美月が悪と戦う力を持つことができたのも、蒼樹瑞穂という存在があったからこそなのだ。

(あの時、私をもっと強ければ……今頃お母さんは何かの研究をしていたのかしら……)

軍将に実験結果を説明しながら、あつたかもしれない幸せに意識をむけてしまう美月。それほどまでに母の存在が少女戦士にとって大きかったということなのだろう。

冷酷な戦いの場に身を置く少女は腫を少しだけ潤ませる。

だが、いつまでも母との思い出に浸っているわけにもいかない。戦場では気丈に振る舞いながらも、実は誰よりも純粋で傷つきやすい心の持ち主である少女に魔の手は迫っていたのだから。

不意に美月のお尻へとムズ痒い刺激が与えられた。

「っん!? ち、ちよっと、どこ触ってるんですか、駒詰教授!」

「んん? 触る? ワシが? そんなことしたらんよ。それより、続きを説明してくれんかの」

(……この人、くううう……呼び出しはそっちのためだったのね)

眉間に皺を寄せ、険しい表情をみせた美月は椅子に座る軍将の横に立ちながら説明を続ける。最初の内は美月の話を大しく聞く軍将であったが、しばらくすると枯れ枝のように骨っぽい手が白衣の間に潜り込み、タイトなスカート生地をパツパツに押し上げるまるやかな膨らみへと当てられた。

若い肉体の瑞々しさを堪能するようにツンと上向いた尻肉を摩り、ジワジワと熱を帯びていくのを感じながら美月は口をつぐみ、とぼけるセクハラ老人を睨み付ける。

(やっぱり、あの噂は本当だったのね。逆らえないとわかっていて、こんな女性を辱めることを……最低よ!)

駒詰軍将が運営するこのロボット研究機関が秘密裏に破壊兵器を開発している情報を掴んでいた美月は潜入捜査の中で軍将本人の手柄にも調査のメスを入れていた。

軍将はロボット学会の第一人者や天才と呼ばれる一方で、その権力を盾に嫌がる女の子に無理やりエッチなことをするのが趣味というゲスな一面があることがわかっていた。

拒めばこの分野でやっていくことは事実上不可能になる。コネや地位という政治的な壁の前に多くの女性研究員が犠牲になっっているとは思っていたが、まさかここまで露骨な方法でくるとは。

正義の化身ヒロインである前に、一人の女性としてセクハラ教授を許せないと思う美月は瞬間、拳を握り締め怒りに震わ

せる。

幾多の修羅場をくぐってきた女戦士ならばお尻を這いずる手を捻り上げ、力づくでねじ伏せるのは難しいことではない。しかし、潜入捜査中の身としては、ここで騒ぎを起こし今までの苦勞を水の泡とするのは絶対に避けねばいけないことであった。

権力や地位に屈したわけではない。だが、これ以上の犠牲者を出さないようにするためにも、今は我慢するしかない。

(ふん、あとでお触りの仕返しはさせてもらうわよ。絶対に後悔させてやるんだから！)

最後にもう一度だけギュツと握り込んだ拳から力が抜ける。虫が這いずるような気持ち悪さを送り込んでくる掌を弾くようなことはせず、ただされるがままに身を委ねる少女研究員は権力の権化に捧げられた生贄だろう。

だが、伊達眼鏡の奥に潜む切れ長の瞳は凜とした輝きを失わず、屈服というよりも戦うことを選んだ力強い光を灯していた。

そう、たとえどんな窮地に立たされても決して諦めない不屈の心。それこそが聖結晶姫ミツキの最大の武器なのだと言っ

「んん、蒼樹君は賢いのお。君のように聡明で美人な女性、ワシは大好きじゃよ！」

一方、掌を払い除けないのは同意の証と思っている軍将は美月が抵抗しないことを良いことに、本来の目的へ本格的にシフトしていく。セクハラ教授はキャスターを滑らせ、椅子に座ったまま美月の背後に回る。白衣どころかタイトスカートまでも捲り上げ、両手でお尻を捕えて若い肉体を堪能し始めた。

「くっ……ッ！」

成す術なくゲスな老人の欲望の慰み者にされる屈辱から噛みしめた奥歯がギリッと悔しそうな音を立てる。くぐもった悲鳴が僅かに桃色の唇を震わせるも、すぐに抵抗の意思を示すように力を込めて引き結ばれた。

骨っぽい指先はスベスベとしたストッキングの触り心地を楽しみながら、優しいタッチで丸みを帯びた尻肉を摩っていく。五十センチ台というウエストの細さも手伝って、大桃のようなポリウムを持つ臀丘のラインを丹念になぞり、美少女の持つ形良いパーツを楽しんでいた。

シュツ、シュツと響くナイロン生地の擦れる音が無抵抗に辱められているという事実を聴覚的に伝え、純真な心を持つ少女は恥ずかしさを隠しきれずに頬を桃色に染める。パンティストッキングを張り裂かんばかりに豊満に育ったお尻が僅かに

震え、美月は負けん気を示して両脚に力を込めた。

ここで声などあげればこの男を喜ばせるだけだ。不屈の心は弱味を見せまいと気丈に振る舞おうとする。

だが、指先に伝わる動揺の欠片は、嫌がる女性に無理やりエッチなことを趣味とするという最低の性癖を持つ老人には筒抜けだった。犯してきた異性の数と経験が違つと言いたげに口元を歪め、美月から見えない位置にいる軍将はしゃがれた声で責めたてる。

「蒼樹君のパンティは黒のレースかあ、真面目そうな顔をしていながら、随分とエッチな下着をつけておるんじゃないなあ」

(この、余計なお世話よ……)

密着するストッキング越しに透けるショーツを指摘され、恥ずかしい部分を見られていると再認識させられる。口をつぐんだまま何も言わず、心の中で反論する美月は可能な限り無反応を装った。

「研究に没頭しておるのかと思つたが、これは随分と鍛えておるようじゃな。プリップリツの脂肪を下から押し上げる筋肉のハリがまた絶妙じゃの〜！」

「や……！　ぐ……っ」

表面をソフトに撫でていた五指が尻肉を鷲掴みにする。突然の変化に思わず出そうになる声を殺し、一瞬強張つたお尻から力を抜いた。

「大きさ、形、それに柔らかさ、どれをとつても一級品じゃ。こんなスケベな臀部をしては何をされても文句は言えんのお〜」

自分勝手な論理を押し付けながら軍将の指は左右対称の円を描いて美尻を揉みしだく。力を込めて握られた桃尻が両サイドに引き伸ばされ、互いの弾力を確かめ合うように押し付けられる。身体の一部を玩具のように扱われながらも、湧き上がる微熱は下着に守られた柔尻の内側で徐々に広がり、美月は長い眉を小刻みに震わせてギョツと目を閉じた。

「く……っ、う……ふっ……ん……ッ」

(この人、手慣れてる……ジワジワ、お尻が熱くなって……)

ゴツゴツと骨ばった指は見た目に似合わず繊細で丁寧なタッチで美月の中の女を刺激する。強弱の変化をつけ、リズムを変え、弱い部分を探る手つきは数多の女性を手籠めにしてきた経験からくるのか。堪え切れずに出てしまうグラマラスボディの変化に目を細め、スケベ教授は指先に神経を集中した。

これまで数々の非道な敵を相手に勝利を収めてきた聖結晶姫ミツキだが、決して無敗というわけではない。ある時は卑怯な作戦の前に陵辱を受け、またある時は弱体化させられ過酷な調教を受けたこともあった。

最大の武器である不屈の心でピンチを乗り切ってはきたが、美少女戦士の身体に刻まれた淫残な爪痕は完全には消えていない。

その証拠に美月の身体は常人の何倍も性的感覚が鋭敏になってしまっており、本人の意思を裏切った淫乱ボディは少しの刺激でも勝手に反応してしまうのだ。

「うっ……ふ……んうん」

（こ、こんなことくらいで……感じたりなんかしないんだから）

強気を失わぬ少女は自身の内から溢れてくる熱気を否定し、気丈に耐えてみせる。快楽になんか屈したりしないという強い意志は細く整った眉を吊り上げらせ、外道の思い通りになってやるものかと思えない抵抗を展開した。

しかし、そんな我慢すら織り込み済みと言いたげに軍将の掌はねっとりと絡みついてくる。ムズ痒くもどかしい感触。指だけでなく掌も使った愛撫は突き立ての餅のようにプリプリとした尻球をこね回し、美月の芯に快感を流し込んでいく。

力の入った指を生意気に押し返して歪むヒップライン。肉付きの良さを主張するように弾みながら形を変え、押し付けられてきた尻の谷間がムチムチと音を立てる。

「しかし、見れば見るほどいやらしいお尻じゃ。ワシの指に吸い付いてもっと触って欲しいとおねだりしてきとるわ」
（そんなこと、あるわけ……ないでしょ）

好き勝手言われて傷付けられるプライド。当然怒りは治まらないが、段々と余裕がなくなってきたのも事実であった。ジワジワと下半身に広がる淫らな熱は抑えることができず、ストッキングによって引き締められた内腿にピクン、ピクンと強張った筋肉の筋が浮かび上がる。ヒップのボリュームに負けじと肉付き良く、それでいて鍛えられた太腿は円錐を逆にしたような理想的な造形だ。

凜麗な脚線美は脹脛と細く締まった足首まで続いている。それらのパーツにも快楽の波は伝わってしまったのだろう。声こそ押し殺してはいるが、やや内股気味になった脚部が感じてなるものかと小さく震え、少女の中の葛藤を滲み出させていた。

「ほれ、蒼樹君。気持ち良いのならもっと乱れてくれて構わないのじゃよ。その方がワシも嬉しいからのお」

「ん、くう……こ、こんなの虫が這いずっているみたいで気持ち悪いだけよ。こんなことで女性が喜ぶと思ったのかしら？
とんだ検討違いね！」

屈服を呼びかけるゲスな声にあえて反抗的に答えてみせる。実際は震える脚の反応を隠しきれなくなってきた。よぎってしまった弱気を振り払うため、美月は己の鼓舞する意味も込めて語尾を強めて反論していた。

「そうかー、そうかー、蒼樹君はこのくらいじゃ満足できんのじゃな？ だったら、こんなのはどうか？」

「ひゃ、ひいん！ ん……ふうっ!? ちょ、ちょっと、そこはー！」

強気を崩さぬ美月の態度に苛立つどころか、むしろ墮とし甲斐すら感じた変態教授はこね回していた尻肉の片方を外側へ強引に広げると、尻の割れ目の中心へ人差し指を押し込んだ。まるで加熱した棒を挿入されたと錯覚する衝撃が美月の尻穴へと走ったのだった。

（や、やだっ……そこ、お尻の穴……そんな、ところまで……こいつ、本当に変態だわ）

パンティストッキングとショーツという二枚の膜のおかげで、軍将の指はそこまで深く入ることはなかった。だが、ショーツの裏地がもたらすムズムズとした感触は独特の刺激を生み出して美月を責め立てる。

ねじこまれた指先がもっと奥に入り込もうとグリグリとほじられると、駆け巡る快楽の波長は一気に増大し、二つの三つ編みを揺らして身悶える白衣の少女。身体の芯を溶かされていくような甘い感覚が下腹部へとジクジク染みこんでいく。

「先っぽで少し撫でてやっただけでこの反応。蒼樹君のお尻は随分と開発されているようじゃな」

「そんな、こと、な……ひっ！ くう、ひい……ふうううう」

布地の伸びる限界まで指が入り込み、桃色の電流が駆け上がる。否定の言葉すら甘い喘ぎに取って代われ、痴態を晒してしまった美月は耳を真っ赤にしていた。本来であれば排泄するための穴で気持ち良くなってしまっている。過去の陵辱の痕とはいえ、純情な少女にとって、それは隠したい恥ずべき記憶であった。

美月の尻中の弱い部分を探り、しつこく流し込まれる尻快楽は無垢な少女を消耗させていく。無意識の内に動き始めた細腰は力が抜けて身体を支えきれなくなってしまうっており、悩まし気に揺れる姿は眼福だ。

内腿を擦り合わせなんとか耐えていたムッチリ太腿は戦慄きが増し、今では立っているのも辛そうな様子が手に取るようにわかってしまった。頼りなくフラつき、それでも立つのを止めないのは美月の気の強さが支えていると言ってもいい。

「どうじゃああ？ 蒼樹君、尻穴ほじらて気持ちいいじゃろ？ ほれ、言うてみい、肛門ほじほじされて気持ちいいです、

と」

「だ、だから、んっひいいいっ！　ち、違っつて言ってるでしょ、はあ、はあー、はあー、んひい……こんなの、気持ち良くなんて、んんんっ！　な、い、わよ……」

呼吸を乱しながらも、搾り出すように抵抗の意思を示す美月。だが、言葉に反して細肩は細かくピクピクと何度も弾んでしまい、強がっていることを隠し通すことができなくなってしまっていた。

心はどれほど拒もうとも、マゾヒスティックな調教開発の芽が出てしまった身体は喜んでしまっている。艶を含んだ喘ぎ声はだんだんと大きくなり、はつきりと紅潮した頬が少女の表情の色っぽさを増させる。

額に浮かぶ汗粒は上昇した体温の表れであり、性的昂ぶりが全身に巡ってしまっている証でもあった。骨っぽい老人の指はゴツゴツとした感触を強め、細い眉が八の字に歪む。快楽に支配されるメスのマスクが浮かび始め、悲鳴を堪えようと口端が戦慄く姿は戦士でなく抵抗できない少女の姿であった。

ギリギリのところでなんとか耐えているものの、何人もの女性をねっとりと責め落としてきた軍将にとって、美月の反応は想定内のものだった。故に次にどうすれば効果的なのかを経験から熟知している変態博士は責め手を次の段階に移行する。

「気持ち良くない？　はて、ウソはいかんのぉ、蒼樹君」

淫熱を生じさせていた軍将の指先がアナルから不意に抜かれた。懸命に、そして健気に耐えてきた美月にとってその瞬間は待ちに待っていた時と言っていていいだろう。

解放されたという気の緩みが生まれてしまうのは仕方のないこと。だが、未だに敵地を脱出できていない孤独なヒロインにとって束の間の休息は畏でしかなかった。

ぬちゃあああああゝゝ！

「ひゃああ！　やっ、あ、な、なにをして……下着、脱がさないで！」

卑猥な液音が室内に響き渡り、美月の下半身を守っていたパンティストッキングとショーツがいっぺんに捲り下ろされ、膝の辺りで中途半端に止められた。下着を使って脚を拘束されたような形になりバランスを崩しそうになった美月の腿肉が辛そうに震える。

「上の口は一生懸命否定しておるようじゃが、下の口は正直じゃなあ。のぉ、蒼樹君、お主のおマンコから垂れているこれはなんじゃ？　うん？　うん？」

(そんな、私アソコ見られてる……こ、こんなことまでさせるつもりじゃなかったのに……)

軍将を満足させ、ほどほどのところで逃げの口実を述べるはずが秘部を晒すまでに発展してしまった。焦りは顔に出てしまい、後悔しても手遅れである。

ズリ降ろされ生地の裏返ったショーツのクロッチ部分は暴かれた淫裂との間にトロトロとしてハチミツのような粘り気を持つ半透明の液のアーチがかかっていた。軍将の羞恥を煽る問いかけに美月は口をつぐんでいても、昂ぶってしまった性器は素直に反応し、膣蜜が恥ずかしい染みを作ってしまう。

「ほっほおおお、身体はいやらしく成長しておるのに、こっちの方は赤ん坊のようにツルツルなんじゃな。その上クリトリスは大きくてワレメからはみ出しておるし、蒼樹君はマニアックでスケベな身体しておるのおお」

(くっ、言わないで……子供の頃から全然生えてこないだから仕方ないじゃない。クリだって勝手に大きくなっちゃってるのよ……気にしてるのに、本当に最低!)

女性として理想的なプロポーションを誇る美月であったが、彼女の陰部には産毛すら生えていない。ツルツルのパイパン体質な上、同年代と比較して明らかに大きな陰核は美月がコンプレックスを持っている場所であった。

デリカシーの欠片もなく恥ずかしい場所を声高に指摘され、怒りが燃料として投下される。こんな奴の思い通りになど絶対なつてやるものか。冷たい氷の刃のような瞳に熱い闘志を燃やし、変態教授を睨み付けようとする美月。

「ふあああああ、おふう、ふっ、はっ、やああ……お尻、だ、ダメえ!」

だが、立ち直りかけた闘志は老人の指先一つでいとも簡単に萎えさせられる。ストッキングとショーツの守りを失い、無防備に晒されてしまったアナルに先ほどの倍、二本の指を差し込まれてしまったのだ。

菊門のシワを伸ばされ、括約筋が広げられて先ほどまでとは比べ物にならない尻辱の波長がお腹を熱くする。邪魔するものがない指先は更に奥へと進み腸壁をくすぐると、甲高い悲鳴を上げた美月は目を見開いて肩を大きく弾ませた。

「クフフフ、やっと可愛い声を出してくれたのお。ほぐしてやっていたとはいえ、いきなり指二本呑み込むとは、蒼樹君のケツマンコは開発済みのようじゃの。パイパンケツマンコの淫乱な身体なんじゃ、もっといやらしい声を出していいんじやよ」

「ち、違うわ、開発済みなんて、ひやあああ、あう、はげ、し……あう、はあ、はあ、ひっくううう」

(お尻が熱い……中をほじられると力が抜けてく。こんな恥ずかしいことされてるのに、お尻が快樂を受け入れようとしち

やってるわ)

喘ぎのひとつも漏らすものかと決めていたのに、もう声を押し殺すことができない。軍将の望む通りに浅ましい嬌声を発してしまい、淫楽に身体を蝕まれていくのを自覚しながら美月は呼吸を乱れさせていく。

腸壁をカリカリと引っ掻かれるとお腹が蕩けてしまいそうな快感が生まれ、尻タブが跳ねて美脚が辛そうに震える。引き締まった太腿がガクガクと揺れ出すと、上体を支えることも覚束なくなり、美月は目の前の机に両手を付いて倒れることを辛うじて回避した。

しかし、上体が前傾になってしまったせいで腰とお尻を突き出す形となってしまう、変態教授を喜ばせるポーズが出来上がってしまったのだ。

「自分からお尻を突き出しておねだりとは、これはワシもすっかりと応えてやらねばのお」

「ちが、う……んひいいいいいい！ あううツ、くひいい、ふあううう……おし、りが……ひいん、あちゅいいい」

(お尻があ、お尻が融かされちゃう……このままじゃダメよ、か、快楽に流されちゃ……我慢しないと……)

少しでも快感を逃がそうと捕らわれの獲物は健気に抵抗し続ける。諦めてしまったら、削られていく精神は快楽の波に呑まれてしまう。そうなってしまったら、もうおしまいだと自分に言い聞かせ、美月は深呼吸を繰り返した。

「うふうー、はあー、っふううう！ はあ、はあ……ふうううー、はああああっ」

(息を吐いて、力を抜いて……少しでも快楽を逃がさない……大丈夫、私は耐えられるわ)

流されそうになる意識を繋ぎ止め、丸みを帯びた両肩が激しく上下している。苦しうに繰り返される呼吸でいつしか口を閉じることができなくなってしまい、震える桃色の唇の端からはだらしない唾液が糸を引きながら垂れ落ち始めていた。腸壁をカリツ、カリツと擦られる度に身体を支えようとする力が抜けていく。二の腕と肘が戦慄く両腕は気を抜けば机に突っ伏しそうになり上体を保つのが精いっぱい、零れる涎を拭う余裕すらなくなっていった。

「あっふうううう、んっああああ、お、しり……つらい、んひいいいいいん！」

(お尻がとろけるうう……耐えようとする力が漏れ出てるみたい……しつこすぎるわよ……)

耐えるだけでは何も変えられない。むしろ、悪戯に体力と気力を削ぎ落されていき、ジリジリと限界が迫ってきていた。羞恥と昂ぶりで真っ赤に染まった頬。前髪を額に張り付かせるほどに滲み出た汗がシャープな顎のラインを伝って滴り、手を付いた机の上で垂れ流した涎と混ざり合い、恥ずかしい染みを作ってしまう。



ギョツと瞼を閉じて三つ編みが揺れるほど頭を振る。かと思えば目を見開いて顎をのけ反らせ悲鳴を上げる。

感じていないなどと強がっていた生意気な少女の姿は見る影もなくなるほど悶えさせられ、潜入少女の保ってきたプライドはズタズタに切り裂かれていくのだ。

「フオフオフオ！ 気持ち良くないなどと強がっておいてこのザマとは。触ってもいないのに、おマンコが涎を垂らしておるぞ。いい加減、ケツ穴で感じる変態と認めたらどうじゃ？」

「んひいいい、ツ、うううん！ ひ、ひがう、それはただの生理現象で、あひいいい！ 感じて、なんて、ぬっうっううううー！」

（いちいち言わないで、アソコが疼いてることくらいわかっているわよ。直接触られない分、切なくて辛いわ……）

軍将のセクハラはあくまでアナルに限定されている。美月を尻責めだけでイカせる。そうすることでお前はアナルマゾなのだと否定できない現実を証明するためにあえて触らないでいるのだ。

快楽のスイッチが入ってしまった性器は美月の心を裏切っすっかり蕩けきってしまった。元々感じやすい体質ではあるが、特に入念に開発されてしまっていたヴァギナは別格の反応を見せていた。

充血した陰唇は肥大化して左右に開き、アワビのような肉丘がパクパクと物欲しそうに開閉を繰り返す。勃起したクリトリスがはじめにほしようにピクピク震えているが相手にしてもらえず、潜在的にマゾヒスティックなボディには逆に辛いお預けだった。

産毛の一本もないスベスベのワレメは覆う物が何もなく、サーモンピンクの腔溝が白濁していく蜜を垂らしてしまう。ねっとり糸を引き、線を描くように垂れる愛液は中途半端に脱がされたショーツのクロッチ部分に染みこみ、淡い色の水溜りを作っていく。

（ゴツゴツして骨っぽいところが腸壁のヒダヒダ引っ搔いて……すごい、こんなの、気持ち良すぎて……）

口ではなんといっても、心の中で快楽を認めてしまっていた。それは美月にとつての綻びだ。

指を抜かれる感触は排泄の瞬間に似た開放感を与え、引き攣った喘ぎはいっそうトーンを上げて喉を震わせる。まるで指の動きに合わせて理性やスタミナを掻き出されていると錯覚するほどの陶酔感が美月から闘争心を奪っていった。

「しぶとい蒼樹君もそろそろ限界のようじゃのお。大きな尻がプルプル震えて、今にもイキそうなんじゃ。ほれ、これでトドメじゃー！」

肩も背中も攀ってしまいそうなほどに強張ってしまい、腰とヒップが電気を流されたように弾んでいる。膾蜜で内腿をベチヨベチヨに濡らす太腿は無様な痙攣を繰り返して弱々しい。生まれたての小鹿のように膝が震え、立っているのも覚束ない足取りは下半身を乳酸漬けにして自由を完全に奪い取られてしまった。

「ひゃひゃひゃひゃ！ 盛大に潮まで吹いて、完全にイッてしまったのお。のお、蒼樹君？ これでもまだ気持ち良くなっ
てなどいらないと言いきれるかのお？」

「んっ……ハア、ハア、ハア……ひっ、くうう……あああゝゝ」

腸液を絡み付かせた軍将の指が液系を引きながら引き抜かれる。長い絶頂の時から解放された美月は体中の筋肉が弛緩してしまったかのように力が抜け、机に縋りつくような形で崩れ落ちてしまった。

四肢にまるで力が入らず、変態教授の嘲りに言い返す気力もない美月は打ち上げられた魚のように唇をパクパクと動かしながら尻責めに屈してしまった恥ずかしさで押し潰されそうになっている。

どうしようもなく悔しいのに、ヒクつく肉壁は更なる快楽を求めてしまい、恥蜜をジワジワと湧き上がらせて淫らに震える。火のついてしまった異常性欲は一度の絶頂では治まってくれず、肌という肌が敏感になり過ぎて、お尻に伝わる冷たい床の感触だけでまたイキそうになってしまいうくらいであった。

快楽に忘我し、否定できない発情メスの表情を晒してしまう正義の女戦士。あろうことか敵地のど真ん中で弱り切った姿を見せてしまい、満足に動けないことを悟られてしまったのは孤独な戦士にとって致命傷であった。

「レギオンを滅ぼした聖結晶の戦士もこうなってしまうえば今まで相手してきた女共と変わらんのお。いや、むしろ蒼樹君は他の奴らよりも感じやすかったわい」

「えっ!?! い、いま、聖結晶って……まさか、私の正体がバレていたの……マズイ、このままじゃ、本当に……」

勝利を確信し、トレードマークの顎髭をいじる軍将が口にした聖結晶という言葉。一般の研究者であればまず知ることのないキーワードは軍将が敵であることの確定と美月の潜入が知られていたことこの証明であった。

軍将が机に備え付けてあったボタンを押すと、突如床が円形に開いて透明なカプセルが二つせり出す。それぞれのカプセルから一体ずつ人型ロボットが出現すると、軍将は美月捕獲の命令を出した。

（私を捕えるつもりなの……くう、お前の思い通りになんて、ふああ……な、なってやるもんですか!）

絶頂の余韻が色濃く残るグラマラスボディは未だ思い通りには動かない。このまま蒼樹美月で居続ければ軍将の用意した

ロボットに手も足も出ずに拘束されてしまうだろう。そうなれば、待っているのは人としての尊厳すら奪われた過酷で無惨な日常だ。

ゲスな男達の考えは今まで嫌というほどその身をもって経験してきた。正直なところは意識を保つのも辛い。それでも、歯を食いしばれるのは蒼樹美月の強さだった。

(とにかく、今はこの場を脱出しないと。お願い力を貸して聖結晶！)

「ッ、ううう、はあ、はあ……ちえ、チェンジストラクチャー！」

息も絶え絶えになりながら、胸元に手を当てた美月は聖結晶の力を解放し、エネルギー粒子を展開して変身のための特殊力場を形成した。

まさか、イツたばかりにも関わらず美月が変身できるとは思っていなかった軍将は慌ててのけ反り、不屈の変身ヒロインの矜持を示す蒼い粒子の力場に目を丸くしていた。

「あ……んうっ！」

変装のための眼鏡が消え、三つ編みが解かれて蒼樹美月本来の姿へと戻る。変身のために衣服が分解されると美月は思わず艶っぽい声を上げてしまった。発汗からくる多量の汗を吸ったブラウスも、愛液を染みこませたパンティストッキングも、グシヨグシヨに変色した黒のセクシーショーツも存在しない、一糸纏わぬ生まれのままの姿。

女神と見紛う均整の取れたパーフェクトボディは戦うために鍛え上げられた戦士の身体だ。しかし、つい先ほどまでの肛辱で淫欲が表層化してしまった女の身体でもある。

情欲の残滓に苛まれる裸体は未だに冷めず、美月の全身は噴き出た汗でヌラヌラと照り光っていた。白衣のせいで汗蒸れの酷かった上半身は特に顕著で、桃色に染まった柔肌はそれだけで官能的だ。それに加え、立体感溢れるバストの先端では乳首が勃起し、見せつけるようにビクビク震えている。

蒸れた腋下が発情したメスの甘い匂いを立ち昇らせると間近で匂いを嗅いでしまった美月に己の淫らさを伝えてしまった。

(ああ、私、なんていやらしい匂いを出してるの……)

認めざる得ない発情の香りを受け、下腹部がジュンと熱くなってしまふ。恥知らずにパクつく秘唇が断続的な痙攣を繰り返して愛液をこぼすと、太腿を濡らした蜜がムズ痒い刺激を送って美月の表情を強張らせた。

(ダメよ、今は変身の最中なんだから。集中するのよ、美月！)

聖結晶の膨大なエネルギーをその身に纏う変身は常人では及びもつかない集中力を要求される。それは適合率百パーセントを誇る美月でも同じこと。

発情を振り切れない淫体を抑制し、気力を搾り出す美月は変身のプロセスを進めていった。

「ひいひいん！ぐ、ぐ、ぐうううう、っう！」

美月の胸元に核となる聖結晶が出現し、伸縮性のある半透明のインナースーツが首から下を余すことなく包みこんだ。普段ならばなんとも思わないスーツの密着性。しかし、アクメの残滓に蝕まれ、火照り続ける女肌にとっては全身を舐め回されているかのような快感を走らせた。

モデル顔負けのボディラインをクッキリと浮かび上がらせるほど密着したビニールのような生地が限界まで引き伸ばされ、乳房に、お尻に、股間に吸い付いていく。硬くなって上向いた胸の突起がボタンのように浮かび上がってしまった、淫蜜をこぼすクロッチ部分は変身途中でありながら変色し、恥丘と陰唇の膨らみを伝えるほど張り付いた。変態教授に散々虐められたお尻にスーツが吸い付き、アナルを刺激されるとムッチリと熟れたヒップラインが勝手に震えてしまい、あられもない悲鳴が漏れてしまう。

(スーツ、こんなにキツかったかしら？ 食い込みがすごくて……か、感じちゃう……)

変身中に気持ち良くなってしまおうという背徳的な状況に追い込まれながらも美月はプロセスを継続する。快感を堪えるために拳を握り締めた腕と、何かを掴むように爪先を丸めピクピクと脛脛が痙攣する脚部にエナメル質な黒のロンググローブとハイソックスが装着された。

続いて同色のチューブトップ型スーツが胸を覆い、切れ込みの激しいショーツ型スーツが股間に食い込むと美月は頭をのけ反らせてフルフルと震えた。

スーツの表面を聖結晶のエネルギーが伝播するのを感じながらも、同時に這い上がってくる快感に耐えねばならない変身少女は歯を食いしばる。特にショーツの送る刺激は激烈で、すっかり蕩け切ってしまった陰唇は股下部分から押し出されて、ふやけた恥肉の肉感を見せつけてしまっていた。

インナーを湿らす恥ずかしい汁は変身途中だというのに溢れ出てしまい、黒のスーツの表面に淫猥な縦筋を浮かび上がらせてしまっている。

（変身完了まであと少しよ。ひっ、ぐうう、た、耐えないと……）

湧き上がる性感に耐え変身を継続するミツキの長髪が金色に染まる。黒のリボンでポニーテールに結い上げられたブロンドを背中に垂らすと、最後に武装である手甲と脚甲が四肢を覆った。

変身が完了し、役目を終えたエネルギー力場の粒子は美月の頭上で天使の輪のように収束して解放された。悪を滅ぼすための姿へとその身を変えた少女は鈴の鳴るような凜とした声で己が名を高らかに宣言する。

「聖結晶姫ミツキ、ここに降臨！ う……く、っ……ハア、ハア、ハア……」

破邪の力を解放し、敵を睨み付ける正義の女神。しかし、その鋭い眼光は目の下がピクリと跳ね、唇を噛んで声を殺す辛そうなものになりに変わってしまった。

「まさかイカされた直後に変身するとは、天才であるワシにも予測できなかったわい。じゃが、だいぶ無理をしたようじゃなあ。聖結晶の輝きが随分と鈍いのではないか？」

最強の美女神の登場にも冷静さを失わない悪の科学者は状況を冷静に分析する。聖結晶は使用者であるミツキの心に呼応して無限のエネルギーを生み出す神秘の宝石だ。その気持ちは充実すれば輝きを増し、まばゆいほどのパワーを生み出す。

だが、今のミツキの胸元に位置する結晶は淡い蒼色の光を辛うじて灯している程度。出力が低下し、本来の力を発揮できていないことが手に取るようにわかってしまう。

（なんとか、変身はできたけど……身体の火照りが、アソコが疼いて……思うように力が出ないわ……）

ミツキの強靱な精神力だからこそ変身できた。だが、くすぶる淫熱は抑えきれず、スーツによって圧迫された全身に走る甘い刺激に耐えながら戦わねばいけない状況だ。

女性の嫌がることをするのが趣味というゲス教授にとって、そんなミツキの状況を見抜くのは簡単なこと。自身の優位さは揺らいでいないと確信した軍将は二体のロボットに攻撃の命令を下す。

拳を振り上げ、助走を付けて襲い掛かってくるロボットに対し、ミツキは回避行動を取ろうとした。だが、淫樂に蝕まれた脚は膝が震えてしまっており、いつもの軽やかな動きに枷を嵌める。

「か、躲せない……くうふあああああああ！」

手甲を纏った腕を交差し、敵のパンチを防ごうとしたミツキの身体は衝撃が駆け抜ける。ロボットのパンチはいわば金属の塊で殴りつけられるようなもの。聖結晶の力で生み出された防具には傷一つ付けることはできないが、叩きこまれたべく

トルは吸収しきれない。

結果的に鉄塊の衝撃は敏感になっている乳房やお尻を揺らすパワーに変換されてしまい、性的に脆くなっている欲情ボディは戦慄してしまう。踏ん張りの効かない脚はフラフラと後退してしまうと無防備な背後からもう一体のロボットが迫りミツキを羽交い絞めにした。

「しまった！ でも、この程度のパワーなら！」

天才科学者の生み出したロボットとはいえ、そのパワーは聖結晶姫には遠く及ばない。せいぜい数秒動きを止める程度で簡単に振り解けるものだ。もっともそれはミツキが本来の力を発揮できればの話であった。

変身前から疲弊していた孤独なヒロインは拘束からの脱出に力を注いってしまった。

だが、敵は二体。本来の集中力を発揮できないことも影響して、ミツキは眼前の敵の攻撃に一瞬反応が遅れてしまう。バキイイイイイ！

「はぐううううう！ ああああああーっ！」

ミツキの胸の結晶体。聖結晶へと追撃のパンチが炸裂すると、気丈な女戦士から情けない悲鳴が上がる。拘束から脱出しようとして力を含めようとした四肢は弛緩し、ガクガクと震えることしかできない聖結晶姫。

「情報通り、聖結晶姫の弱点は胸の結晶体じゃったな。ほれ、もっと殴ってやるんじゃ！」

主の命を受け、機械的に使命を果たすロボットは左右の拳でリズムカルにパンチを放ち続けた。機械ゆえの正確さで狙いを外さず、エネルギーの源を攻撃され続けるミツキは泣き叫ぶことしかできなかった。

（こ、こんな……聖結晶を集中攻撃されたら……ち、力が入らない……身体がバラバラになっちゃう）

聖結晶はミツキのエネルギー源であると同時に最大の弱点でもある。結晶体へのダメージはエネルギー回路を通じてミツキの身体にフィードバックされてしまい、数倍の痛覚として女神の美体を蝕むのだ。

容赦ないパンチの連続は心臓を金属ハンマーで殴り続けられるようなもの。全身の筋肉がミンチにされていくような激痛がミツキを襲い、明滅する意識の影響で聖結晶の輝きは増々弱くなってしまふ。それは聖結晶姫の持つ奇跡の力の衰退も表すのだ。

敵ロボットの攻撃は左右合わせて五十発は叩きこまれたらどうか。喉が裂けそうなほど苦痛の声を上げ、背後から敵に叩いてもらわねば立ってもいられないミツキに対し、更に弱らせることを目的として攻撃のパターンが変わる。

「ごっちはあああああー！ お、おえっ、がはっあああああー！」

薄っすらと腹筋の浮かぶ鍛えられたお腹へと叩きこまれるボディブロー。攻撃の変化をまったく予知できていなかったミツキは唾液を吐き出して悶絶し、上体をくの字に折り曲げる。しかし、拘束側のロボットがミツキの背中を引き伸ばすと、括れた腰が再度敵に晒された。

「うええええええ、うっ、ぐ……ウ、あ、あ……」

引き締まった腹部に鉄塊が五ミリほどめり込む。押し潰された筋繊維がブチブチと嫌な音を立てて不屈の戦士の身体を壊していった。

「あー、顔は絶対に殴るでないぞ。この美貌が苦痛に歪むのがいいんじゃないから」

(どこまでも、最低な男……負けたくない……こんな奴なんかには負けたくない！)

歪んだ欲望を丸出しにする軍将の言葉が揺らぐミツキの闘志に燃料を投下する。負けん気の強い少女だからこそ、その怒りをむける相手がいることは反抗の意思を強くさせるのだ。

鳩尾に打ち込まれた拳で胃が痙攣し、苦痛の表情を浮かべるミツキの口から黄色の液体が噴き出す。何度も何度も同じ箇所を叩かれ胃が空っぽになっても絞り出される体液。呼吸が乱れ、息をするのも苦しい状況に追い込まれながらも、ミツキの鋭い眼光は軍将を射殺さんばかりの勢いで睨み付けていた。

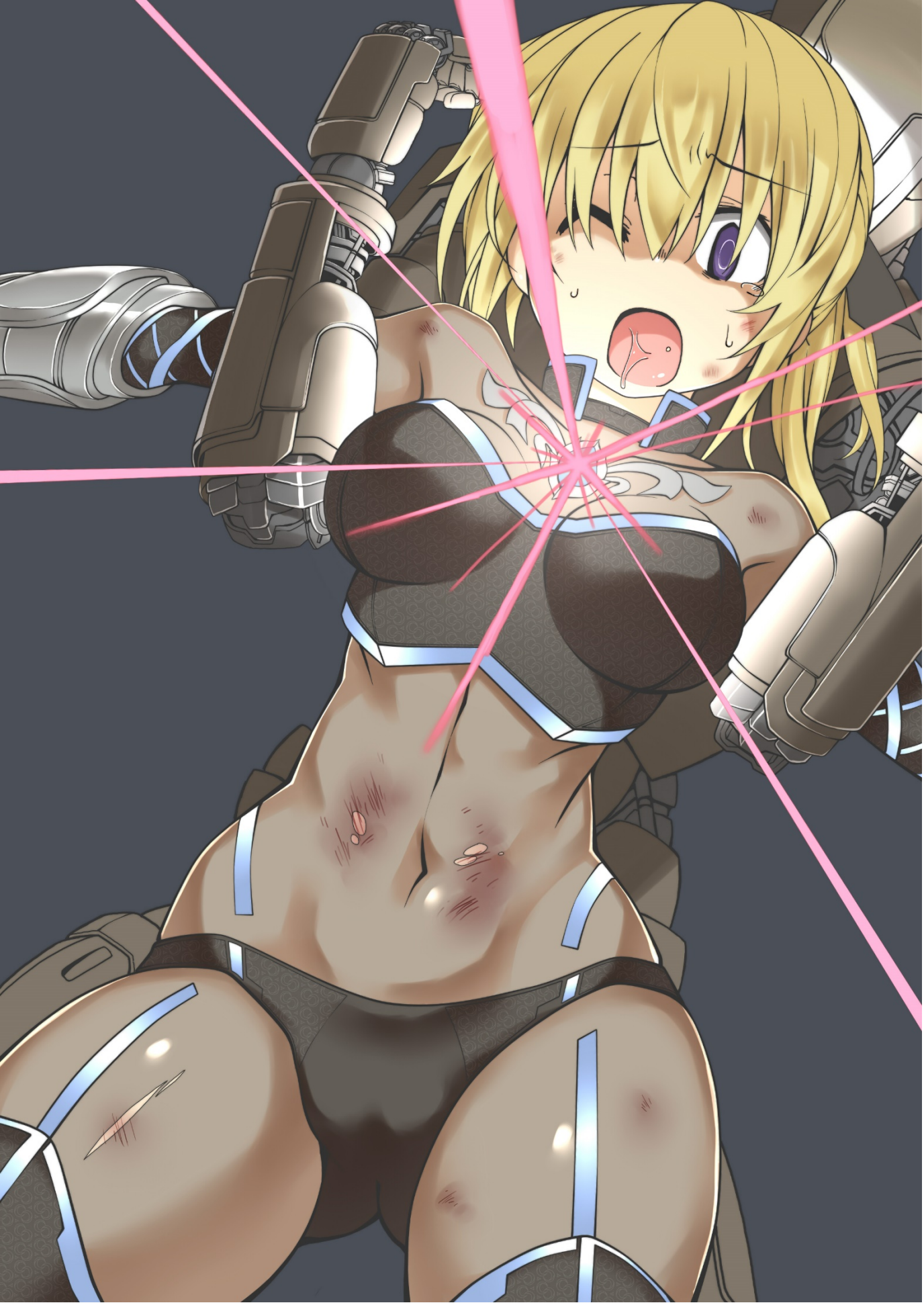
「ほー、拘束も振り払えんほど弱つるといいうのにその目つき。不屈の戦士とはよく言ったもんじゃ。じゃが、これでも耐え切れるのかのお？」

抵抗を止めない気丈な乙女の精神はサド老人の嗜虐心を刺激する。攻撃用のロボットに新たな命令が送られると、ミツキを殴るのを止め、代わりに掌を突き出した。開かれた掌の中心は小さなレンズが取りつけられており、黄色く光る照射機にエネルギーが溜まっていくのがわかった。

これから訪れるであろう責め苦を悟りながらも逃れることのできない聖結晶姫。チャージされたエネルギーはレーザー光線となってミツキの力の源である聖結晶へと照射されたのだ。

「ふあああああー！ や、やめてええええええー！ 身体が、身体が燃える、あついいいいいいー！ あぎゃあああああー！」

魂を燃やす一撃が急速にエネルギーを消耗させていき、ミツキは命を削られる。



恥も外聞もなく泣き叫び、無茶苦茶に振った頭から涙の粒がキラキラと舞う。最大の弱点を光線で焼かれ、全身を燃やし尽くされるような苦しみが気丈な心を折りにかかった。内臓に熱した鉄塊を流し込まれていくような苦痛。普通の人間であれば経験する前に死に至るであろう灼熱をミツキは体験しなければならなかった。

指や爪先が許容を超えた苦痛にビクビクと痙攣を繰り返し、泡を吹く聖結晶姫。遂には悲鳴さえ出なくなってもレーザー照射は止まらず、神経回路が壊れてしまったかのように長い手足が震え続ける。

ロボットにチャージされていたエネルギーが尽き、ようやく照射が終わると汗と涎と涙でグショグショに汚れた女神のマスクが見て取れた。四肢の痙攣は未だ治まらず、擦れた呻き声はミツキの生存を知らせる。

これだけの集中砲火を浴びながら聖結晶は無事であったが、細胞のひと欠片まで燃やし尽くすような灼熱地獄のダメージは肉体に深く刻まれてしまった。

背後から羽交い絞めにされ、床とほぼ水平に保たれた両腕。脱力してダラリ垂れた足は揃えられ、まるで十字架に吊るされたような敗北ヒロインは処刑されたようにも見えてしまう。

「クフフフ、他愛もない。聖結晶がお主の弱点だとバれている限り責め落とすのは簡単なんじゃよ。さて、専用ラボに連れ帰ってお尻の穴から子宮の奥までじっくり調べさせてもらうかのお」

生意気な小娘を力でねじ伏せ悦に浸る変態教授。だが、彼は気付いていなかった。

「あ……う……が、ガント……はあ……レッ……」

圧倒的なレーザー兵器の前に聖結晶は今にも消えそうな光しか灯していない。しかし、その光が消えない限りミツキの心は決して折れていないということに。

「……モード……ダガー！」

消えかけていた聖結晶が発光すると、ミツキの手の中に生成された二本のダガーナイフが手首のスナップだけで投擲される。聖結晶姫の持つ武器の中ではもつともエネルギー消耗が少ない武器、モードダガーの一本は直線的な動きで眼前のロボットの頭を跳ね飛ばし、もう一本は曲線を描いて背後の敵の頭部を破壊した。

集積回路の詰まった頭部を破壊され、煙を上げた二体はバランスを崩すと金属を打ち付ける音を残して激しく転倒する。「な、なんじゃと！ あれでまだ耐えるのか!？」

「ハア、ハア……覚えておきなさい。聖結晶姫ミツキはね、諦めが悪いのよ。そして——」

拘束から解放されたミツキはフラついて倒れそうになる身体を気力で支え、痙攣している太腿を叩いて無理やりにも立ち上がる。

「あなたのような男には絶対に負けないわ！」

歯を食いしばって一步踏み出し、組織のトップである軍将へと拳を突き出した。

怒涛の逆転劇はあと数センチで敵を粉碎する。

——かと思われた。

ガアアアン！

ミツキの拳が届くかと思われた刹那、軍将との間に入るように床が開くと、特殊素材で作られたアクリルのような壁が立ち塞がり、攻撃は不発に終わってしまった。

「危ない、危ない。あと少し反応が遅れておつたらキツイ一撃を喰らう所じゃったわ。だが、ほら、ワシは用意周到じゃから」

室内を二分するようにして床から天井までを塞ぐ透明な壁。目の前に敵がいるというに手が届かないもどかしさにミツキが悔しそうな表情を浮かべると、ミツキのいる側にのみ紫色のガスが噴出し始めた。

恐らくは毒ガスの一種。今のところは聖結晶の力で中和できているが、吸い続ければ追い付かなくなる可能性は高い。(く、ぐうう、悔しいけど、今は一度退却するしかないのね)

軍将のことを最後にもう一度睨み付けたミツキは特殊壁ではない部屋の壁を破壊して廊下へと脱出した。

暴かれてしまっていた聖結晶姫という正体。

快樂に蝕まれ火照りの冷めぬ身体は聖結晶を重点攻撃されてしまったダメージもあり、足元がフラついてしまっていた。「ほう、壁を破壊するために無駄に足掻いてくれるかと思っただが、まだ冷静さは失っておらぬか……じゃが」

ミツキには想定以上にダメージを与えることができた。そして、逃走のヒロインはまだ軍将の箱庭の中にいる。当然、このまま易々と逃がしてくれるはずがなかった。

「傷ついたその身体でどこまで逃げられるかのお？ さあ、鬼ごっこスタートじゃ、聖結晶姫！」
疲弊した正義の変身ヒロインと卑劣な悪の科学者の脱出ゲームが始まるのだった。

※体験版は以上になります。
続きは製品版にてお楽しみください。